

巻頭言

新会長挨拶



榎並和雅

情報通信研究機構

このたび、伊福部先生の後任として、日本バーチャルリアリティ学会の会長を拝命することになりました。本学会は、平成 8 年（1996 年）に発足し 18 年経過しました。その間、初代会長の館暉先生から始まって、原島博先生、岸野文郎先生、佐藤誠先生、廣瀬通孝先生、そして伊福部達先生へと続いて、第 7 代の会長として重責を担うこととなりました。歴代の会長の名を汚さぬよう、また学会の一層の発展に向けて、精いっぱい務めていくつもりです。

さて、本学会の会長就任挨拶では、徳川家代々の将軍になぞらえて、抱負を述べることになっています。第 7 代将軍は家継です。家継は歴代最年少の 4 歳で将軍に就任しました。父である第 6 代将軍家宣には、正妻、側室の子が何人かいましたが、兄姉がことごとく早世し、四男の家継だけが生き残り、将軍職を継ぐことになったのです。そして、家継自身も 8 歳の時風邪をこじらせて亡くなってしまいます。いわば、若輩で短命、しかも消去法でやむなく将軍家を継いだのが第 7 代将軍ということになります。しかし、在位期間中、新井白石、間部詮房等のしっかりした後見人に支えられ、第 8 代吉宗に徳川家を引き継いでいきます。なんとなく、今回会長就任する自分のことのように思えてしまいます。実は、私は本学会の会員になったのは、ほんの 5 年前です。廣瀬先生から本学会の副会長への就任要請があり、そのためには学会員でないとダメだと言われて入会したのです。歴代会長の方々は、学会発足に尽力されたり、学会進展に長年努力された先生ばかりで、私のような学会での経験が少なく、貢献もほとんどしていない、いわば若輩者が会長になるのは

今回が初めてです。しかし、石橋、竹田両副会長をはじめとする経験豊かな理事の方々や事務局員にしっかりと後見していただければ、徳川家を再興した 8 代将軍吉宗へと引き継いだように、なんとか次の会長にバトタッチできるのではないかと考えています。

こんな心もとない私に会長職を任せていいのか、会員の皆さんに不安を抱かせるのもまずいので、ここで、私のバーチャルリアリティに関連する経歴を述べたいと思います。

私は、1974 年から 2006 年まで NHK 放送技術研究所に勤務していました。その 30 余年間の前半では映像信号のリアルタイム処理システムの研究を進めていましたが、後半は研究マネージメントに従事しました。そのマネージャ時代には、バーチャルスタジオ（前景のカメラワークに連動させて背景の CG 動画をリアルタイムに生成する装置）や TVML（TV Markup Language：シナリオを描くだけで CG 番組を自動生成するシステム）、プロカメラマンによる操作と同様なカメラワークで動く自律ロボットカメラなどの映像制作の研究を推進しました。また所長になってからは、超高精細映像システム スーパーハイビジョン（いわゆる 8K）システムの研究を後押しするとともに、そのプロモーションに精を出しました。

2006 年に NHK を退職した後、（独）情報通信研究機構（NICT）に移り、超臨場感コミュニケーションを研究管理するポジションに就任しました。ここでは、

遠隔地の映像音声をできるだけ手元で忠実に再生する、電子ホログラフィや大画面裸眼立体ディスプレイ、立体音響などの「高」臨場感の研究や、物理的には忠実ではないけれども人間にとってリアルに再現しているように感じさせる、また視覚、聴覚だけでなく触覚、体性感覚、嗅覚なども刺激して再現させる、「超」臨場感の研究を推進しました。

NICTでは、NHKと違って研究成果を直接活かす現場を持っていません。そこで、2007年、超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム(URCF)を発足させました。URCFでは、NICTの研究成果だけでなく、関連する企業や学者などの方々にも参加いただき、立体映像や立体音響、五感通信など超臨場感コミュニケーションに関する研究を持ち寄って、議論したり、実証実験したり、展示したりして、参加会員の成果を普及展開させる場を提供しています。原島博先生に初代会長として5年務めていただいた後、現在、東北大学の鈴木陽一先生に第2代会長として活躍していただいています。企業会員70社、大学の先生などの特別会員138名という大きな組織になっています。本学会とも共催で国際コンファレンスや研究セミナーを開催するなど、いろいろと連携しながら活動しているところです。

2013年4月からは、NICTの脳情報通信融合研究センター(CiNet)に移りました。ここでは、脳機能を解明し情報通信の進展や高齢者や障害者支援のための研究を進めています。具体的には、念じるだけで義手義足が動くといったBMI(Brain Machine Interface)や脳の機能に学んで省エネでロバストなネットワークを実現するBFI(Brain Function Installed Information Network)、こころとこころをつなぐHHS(Heart to Heart Science)といった研究です。本学会編の著書バーチャルリアリティ学で「人間がとらえている世界は人間の感覚器を介して脳に投影した現実世界の写像であ

るという見方にたつならば、人間の認識する世界はこれも人間の感覚器によるバーチャルな世界である」と語られているように、CiNetにおける脳研究はバーチャルリアリティと緊密な関連があると感じています。

このように、私のこれまでの仕事は、バーチャルリアリティということを中心に意識していなかったものの、まさにバーチャルリアリティに関わるものでした。しかも、冒頭に述べたように5年前に廣瀬先生に呼び掛けられる前までは、日本バーチャルリアリティ学会の存在すら知りませんでした。しかし、本学会に所属して、バーチャルリアリティが、科学技術だけでなく心理学、生理学、芸術、社会学、そして哲学までも含む学際的なものであることを知り、そうした視点でNHKやNICTでの研究を見直すと、研究内容をより深掘りできるとともに、より広範囲に社会展開が可能であることを見出しました。

本学会はこのように、大きなポテンシャルを持っているにもかかわらず、産業界からは知名度が低いように思います。企業および国の研究機関出身の会長として、これまでの会長が作り上げてきた路線に沿いつつ、さらに企業からも一層認知される学会へと発展させることに努力を払っていきたいと考えています。

皆様のご支援を、よろしくお願いします。

【略歴】

榎並和雅 (ENAMI Kazumasa)

情報通信研究機構 脳情報融合研究センター 副センター長

1948年7月愛知県生まれ。1971年東京工業大学工学部電子物理工学科卒、同年NHK入局。74年放送技術研究所へ、先端制作技術研究部長、総合企画室[デジタル放送推進]担当局長などを経て、04年放送技術研究所所長。06年から(独)情報通信研究機構(NICT)に移り、ユニバーサルメディア研究センター長、08年から同いはいはんな研究所長(兼務)、10年より同理事、13年より同脳情報融合研究センター副センター長、R&Dアドバイザー(兼務)、現在に至る。2007年3月には超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム(URCF)を立ち上げ、会長代理として運営にあたっている。映像情報メディア学会元副会長、日本学術会議連携会員、IEEEフェロー、博士(工学)。2009年-2012年本学会副会長。